



濱口梧陵

海面がひいたのをみて津波を予想し、高台にある稲わらに火をつけ村人を高台に誘導し多くの人命を救いました。

梧陵はさらに、被災後に4600両余の私財を投じて堤防を築き、広村の復興と防災につとめ

ています。

この話を知った小泉八雲は、のちに彼を「リビングゴッド A Living God」と呼び、戦前の国定教科書にも「稲むらの火」として紹介され、梧陵は義人として世界にその名が知られるようになりました。

銚子に戻ってから、安政5年（1858）に全国的にコレラが大流行しました。幸い銚子にはコレラがはいってきませんでしたが、この大流行を憂えた梧陵は、当時銚子で開業していた順天堂門人で蘭方医の関寛斎（1830～1912）にこの治療法を学ばせようとします。濱口家が全額援助するからといって長崎遊学をすすめました。

安政5年は、好生館ができた年ですが、江戸では伊東玄朴らが、種痘の普及のために同年5月に神田お玉ヶ池種痘所を開設しました。ところが同年11月に神田相生町から発生した火事によってお玉ヶ池種痘所も焼失してしまいました。寄金に



いまだ残る梧陵の築いた防波堤
（和歌山県有田町）

よってようやく設立した種痘所でしたから、再建費用が工面できず、途方にくれていたとき、その費用として300両を寄付して再建を助けました。これがのちの東大医学部につながったのです。

長崎遊学をすすめられた関寛斎も、家族を置いて出かけることで迷っていましたが、梧陵の近代医学にかける情熱と自分への高い期待を感じて、迷っていた長崎遊学を決意します。

梧陵から渡された100両のうち、50両を妻子に渡し、残りの50両を長崎遊学三年間の費用に充てました。寛斎が長崎に出発したのは万延元年（1860）でした。50両は決して十分な額ではありませんでしたが、寛斎は妻愛子の手織り木綿の着物で通し、乞食寛斎といわれても平然として学習に励んだといえます。

寛斎は、長崎ではポンペに師事し、長崎修学の三年間で、ポンペの最新医説とともに「医者とは病人のためにある」という医の倫理をも心に刻んで帰郷します。関寛斎はその後、戊辰戦争では敵味方なく負傷者を救済します。新政府に仕えたとおそらく軍医総監クラスにまで行くだろうと言われた人ですが、官を辞して、徳島で町医として開業医を続け、恩をうけた濱口家の家産が傾いたとき、その立て直しに成功します。さらに73歳のとき、北海道に渡り、牧場開拓を始めます。苦難の末に牧場開拓に成功します。ところが徳富蘆花と知り合い、トルストイの農業共同体思想に共鳴した彼は、牧場を自作農に解放しようとして、家族の反対に逢い、挫折して生涯を終えます。

濱口梧陵は、明治13年（1880）には和歌山県初代県議会議長となり、政治家としても活躍し、世界旅行の途中、明治18年（1885）にニューヨークで波乱の生涯を終えます。

濱口家はその後醤油業を発展させ、ヤマサ醤油として発展しつつ、イノシン酸の発見など新たな医薬品分野への挑戦を続けているとのことで、濱口梧陵の近代医学への支援と通ずる者があるかもしれません。

津波の話から、近代医学の発達にこうした経済人の援助があったことを思い出したので、つい、書いてみました。濱口梧陵記念館は津波防災教育センターも兼ねて、和歌山県有田町広川にあります。

様々な分野で、できるところからの復興支援によって復興が進むことを願っています。（青木）

佐賀医学史散歩・・・石長寺

福地文安のこと

青木歳幸

2011年3月7日の午後に、佐賀大学近くの石長寺の石碑調査に井上敏幸佐賀大学名誉教授、大塚俊司佐賀大学地域学歴史文化研究センター教務補佐員とでかけた。近くにお住まいの田中道雄佐賀大学名誉教授も途中から駆けつけられた。

石長寺跡は佐賀大学と辻の堂の間のほぼ中間にある。石長寺はすでに廃寺となっており、墓石や石碑の奥に民家が一軒あるだけである。

じつは佐賀大学から辻の堂にかけての道路拡幅工事にこれらの石碑や墓碑がかかり、処分される怖れがあったからだ。県立図書館の郷土資料室多々良友博氏も駆けつけてくれた。

井上先生らが石長寺の由緒を記した享保14年の碑文を解説している間に、田中先生は風邪気味とのことで途中で帰られた。帰るときにこの辺の墓碑も以前調査したことがあると多々良氏につぶやかれた。

青木が川崎延賢という川崎道民の先祖関連だと思われる墓碑を調査し、多々良氏は田中先生が指摘したあたりの墓碑を解説していた。それが福地文安墓であり、その碑文が次の文である。

福地良敏仲君之墓

福地廣居稱文安家世侍醫老諱卿利稱
道林老扈 駕没於途君年十一承嗣萬
延元年 公命遊大坂學於緒方洪庵文
久三年癸亥夏六月廿日病没嗚呼哀哉

文意は福地良敏仲の墓で、福地廣居ともいう、文安と称し代々鍋島家侍医である。父親の道林が、藩主の参勤交代にしたがっていた途中で病死したので、文安は11歳で家を継いだ。万延元年（1860）に公（鍋島直正）の命を受けて大坂の緒方洪庵の塾に学ぶも、文久3年（1863）に病没した。ああ哀しいかな、とある。

扈というのは随う意味で、駕は藩主の旅の駕籠ということで、参勤交代に随行していたということだろう。駕の前に敬意を示す闕字があるのでこの駕が藩主のものとなる。



福地文安墓と多々良氏

文安の父親の道林は鍋島公侍医で、『鍋島直正公伝』によれば、医学寮が開講した天保5年（1834）10月21日記事に、「内科に西岡長垣、牧春堂、古賀安道、福地道林等、外科には町医納富春入あり。就中納富は名声高く切腹をし損じたる者の腸を包み、陰囊の瘤を切断し、婦人の陰門より情夫の挿入せる木片を抜き取りたるなどのことありて、のちに古賀穀堂の痔花を截りたるも此人なり」とある。

道林子の福地文安は良敏、廣居などともいい、11歳で家督相続をして、万延元年に緒方洪庵塾に入門したとある。『緒方洪庵伝』所載の門人帳「（適々塾門生）姓名録」の万延元年をみると、次のように出ている。

萬延元年六月九日入門 肥州佐嘉

大須賀道貞
古賀 元才
福地 文安

大須賀道貞、古賀元才、福地文安の三人が連れ立って、緒方洪庵に入門したことがわかる。墓碑銘に鍋島直正公の命令とあるので、藩からの命令で緒方塾に出かけたことがわかる。

このときの医学寮教導方頭取（安政五年から慶応元年まで）が、大庭雪斎であり、雪斎は大坂の蘭方医中天游につき、緒方洪庵と一緒に学んでいたため、雪斎が西洋医学を学ぶなら、緒方洪庵塾だぞと勧めたことは間違いない。

同寺跡にある川崎家については次回触れるとして、石長寺碑文と、福地文安墓、川崎延賢墓は、佐賀医学史にとって、貴重な歴史的事実を教えてくれるものであることは間違いない。なんらかの形で保存が望ましいと考えている。

